２．扇田神明社をめぐる歴史的風致

扇田神明社には江戸時代に佐竹宗家より拝領した御神輿があり、それを大切に守り伝え毎年７月 16 日の例祭を行っている。また、４月３日には江戸時代から続く火伏 祭 のジャジャシコが行われ、春を告げる祭として人々の生活に根付いている。

（１）扇田の成り立ち

①地名の由来

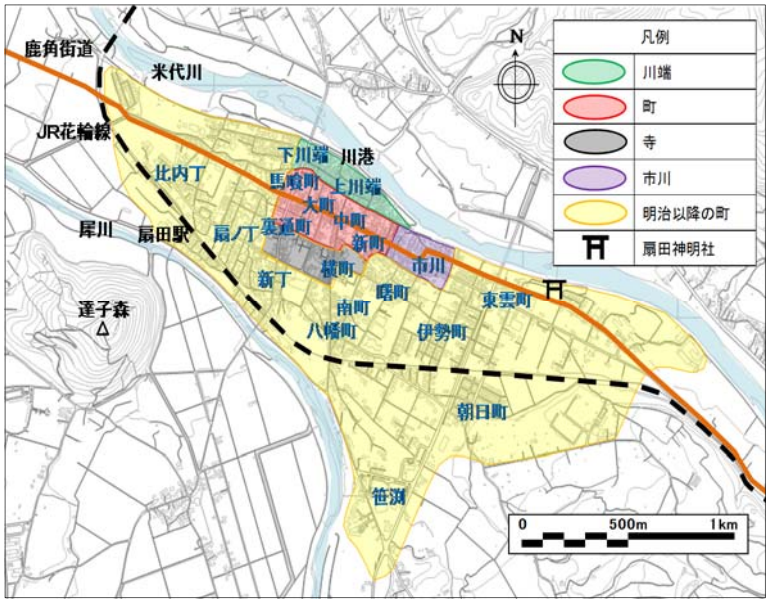
旧扇田村は、市内中央部を西流する米代川の南岸に位置する。

江戸時代の紀行家菅江真澄は「扇に似たる稲田のあり（中略）さりければこの里を扇田の名に負へる」と言い、現在も真澄の言う場所に水路が弧を描いて流れている。現在は宅地であるが、数十年前までは扇形に田んぼが広がっており、これが扇田の名前の由来と言われている。

明治６年（1873）の扇田村略絵図を見ると、米代川の南に接して「川端」があり、そのまた南に「町」があって、さらに南に四つの寺が並んでいる。川端は上川端・下川端に、町は馬喰町・大町・中町・新町・裏通町に分かれていて、町の東側に枝郷として市川があった。

現在は町の区域が広がり、全部で 19 町内となっている。

明治六年扇田村略絵図



明治以降の町の広がり

②舟運で栄えた扇田

江戸時代の物流は、大量の荷物を安全に運ぶための手段として水上輸送が主流であったため、川港は重要な拠点となった。

現在の扇田の市日

米代川は扇田付近まで来ると水深が浅くなるため、五十石船は扇田止まりとなり、扇田の船着場から荷揚げすることになる。そのため扇田には市が立ち、大いに栄えたという。藩内の村々を調べた久保田領郡邑記(享保15年(1730))には「市六斎(月6回開催)富村なり」と特記されている。これは、近隣に大館城があった事のほか、大葛金山や尾去沢鉱山など多くの鉱山があったことも影響している。鉱石は、陸上輸送には適さないからである。

③藍や繭の集散地

扇田は川港であると同時に、周囲に多くの農村を抱えた農産物の集散地でもあった。藍、繭、木炭、工芸品を近隣の村々から集めた。また、秋田県内各地と青森県の弘前も商圏としていたことが次の表からわかる。

米や五十集(加工魚)は若干自家消費をして転売し、葉藍は一部を藍玉に加工し、藁細工はそのまま転売していることが伺える。特に繭の取引は盛んで、春秋2回市が立った。

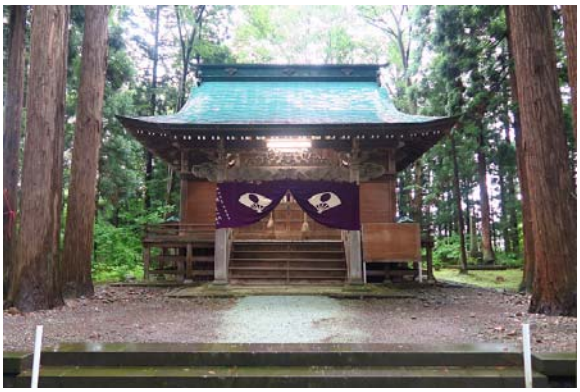
『比内町史』より

輸出			輸入		
品名	数量	輸出先	品名	数量	輸入先
米	2,500石	鹿角郡花輪・毛馬内・北秋田郡・山本郡	米	3,000石	当町近傍町村
五十集	45,000㌔	鹿角郡花輪地方	五十集	50,000㌔	青森県弘前・大館
葉藍	15,000貫	青森県･秋田市･山本郡	葉藍	20,000貫	当町近傍町村
玉藍	3,500㌔	青森県・能代・秋田市	玉藍	—	—
藁細工	100,000ケ	鹿角郡花輪地方	藁細工	100,000ケ	近傍町村鹿角郡

明治30年の扇田町の輸出入調書

（２）扇田神明社の由緒

①創建と遷座



扇田神明社

扇田神明社に伝わる古記録によると創建は文治２年(1186)である。現在地へは、明和３年(1766)に寺社奉行に提出した由緒書によると天正３年(1575)に浅利勝頼が遷座したとされている。現在の社殿は、戊辰戦争で焼失後、佐竹義遵、茂木知端が明治７年(1874)に再建したものである。

社殿は扇田地区の東にあり、扇田の人々は、朝昇る太陽と共に扇田神明社を見る位置関係になっている。

扇田神明社に伝わる浅利氏奉納短刀
（備前国住長船七郎衛門上尉祐定）

一般に神明社という名称は明治の初めに始まったもので、以前は伊勢堂、お伊勢様、鎮守様などと呼ばれていた。江戸時代の紀行家菅江真澄は享和３年(1803)「伊勢神宮をうつし奉った社」と言い、明治６年(1783)の絵図面には、鎮守社と書かれている。現在地の南に伊勢堂岱という地名が残っていることから、往時は扇田神明社がその地にあったとする説もある。

扇田神明社(別当扇田寺)は、江戸時代、南比内の頭巾頭(修験を取り纏めた役職)をたびたび務め、時には更に上位の職である大頭職も務めた。

②戊辰戦争の激戦地

ご神木から出た戊辰戦争時の弾丸

戊辰戦争の際に扇田神明社は激戦地となって血戦が繰り返され、社殿は扇田村の家々と共に戦火に消えた。現在、境内には杉の大木が林立しているが、倒木などを製材すると、銃弾が出てくることがある。それは、この戊辰戦争の時のものであり、激戦を現在に伝える証人である。また、境内には戊辰戦争で亡くなった兵士の墓が残っている。

（３）扇田神明社の例祭

①佐竹の御神輿

扇田神明社に伝わる御神輿は、久保田城の御殿様から拝領したものと言われている。

本殿に向かって右手には、大谷石造切妻屋根の神輿殿があり、新旧二つの御神輿が並んで安置されている。左側にある御神輿（写真－１）が御殿様から拝領したといわれる御神輿で、年代は不明だが扇田神明社に伝わる宝物として、今も大事に保管されている。右側にある御神輿（写真－２）は昭和 43 年（1968）に作られ、毎年例祭時に使われている現行の御神輿で、どちらも佐竹宗家の家紋「五本骨扇に月の丸」である。

佐竹氏は浅利氏と同じ清和源氏義光流で、慶長７年（1602）に秋田藩主となり、以後約 270 年間秋田の地を治めた。秋田藩で大館地方を管轄したのは佐竹西家（大館城）であったが、同家の家紋は丸付きで、御神輿とは紋が異なる。お城のある久保田から見れば、遠い北東の外れに、なぜ佐竹宗家の御神輿があるのだろうか。佐竹氏入部の頃この地方では、浅利氏縁故の人たちが反乱をおこし、新領主を悩ませたが、小場義成（初代大館城代）そして僧玄性の活躍でそれも落ち着いた。

写真－１　佐竹宗家より拝領の御神輿

写真－２　現在使用されている御神輿

一説には、荒れる地方を鎮撫するため、ここ扇田神明社に御神輿が贈られたと言われている。この御神輿は、佐竹氏秋田入部の際水戸から特別に久保田に移したものであることから、扇田を中心とした米代川南地区、いわゆる南比内を重視していたことがうかがえる。前領主の秋田氏が浅利旧臣と決着をつけられず、引き継いだ佐竹氏も苦労したのであろう。

また、扇田神明社には、御神輿拝領の経緯が次のように伝えられている。あるとき佐竹侯がお立ち寄りになり、境内にて野立ての茶会を催した。御屋形様たいそうご機嫌うるわしく、茶会で使用した家紋入りの陣幕をお下げ渡しになり、家紋の使用を許された。これ以降、扇田神明社の社紋は「五本骨扇に月の丸」となり、これがきっかけで御神輿が贈られたというものである。

さて、お殿様が御神輿をくださるということで扇田の町衆は人品骨柄卑しからざる者 28 名を厳選し、久保田へ向わせた。白丁である。御神輿を頂戴した 28 人の白丁は、船で米代川を上って扇田まで無事持ち帰り、下川端の船着き場で陸揚げした。往復 10 日の日程で

あった。この時の 28 人の家は、白丁の家と呼ばれ、現在まで 20 家続いている。今でも、御神輿の飾り付けから運行まですべては白丁が行い、余人は指一本触れることが出来ないとされている。

②例祭

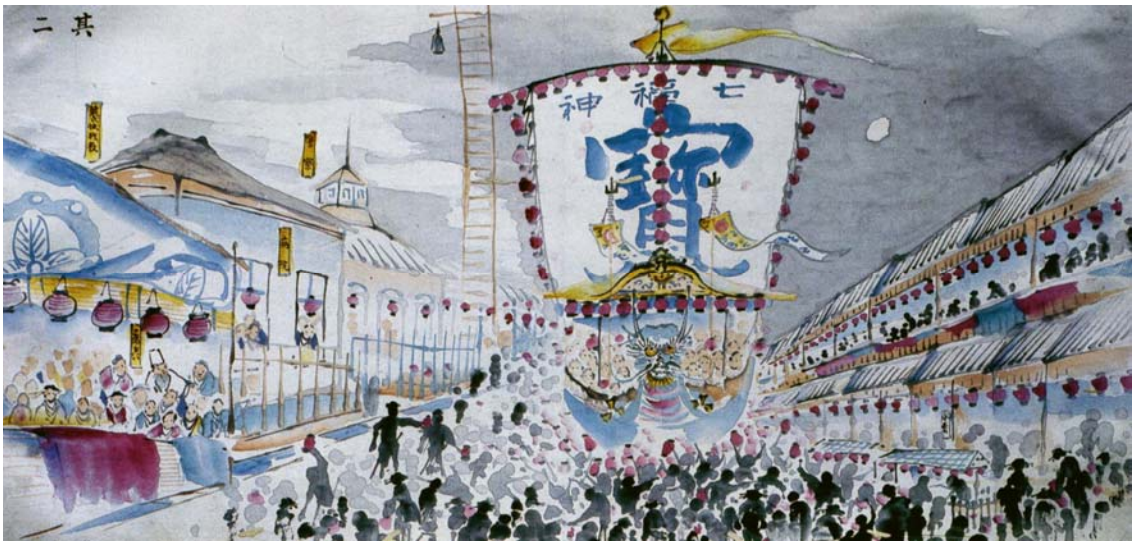
例祭は、創建当時からあったと思われるが、記録としては郷村史略（安政５年(1858)）に「伊勢　祭祀六月十五日」とあるものが古い。現在の例祭は７月 15 日、16 日に行われている。

扇田地区全域を氏子の範囲とするこの例祭は、毎年５月下旬、各氏子町内から集まった総代、神社委員(町内の規模により１～２人)の合同会議が開かれ、今年度の予算が決められ、前年度当番町内から新しい当番町内への引継ぎが行われる。氏子町内は全部で 19 あるが、笹渕を除く 18 町内が３つに分かれ毎年交替で当番町内となる。

担当年	当　番　町　内　名
平成 28 年度	新丁、下川端、上川端、市川、新町、伊勢町
平成 29 年度	大町、中町、馬喰町、横町、南町、扇ノ丁
平成 30 年度	曙町、東雲町、八幡町、裏通町、比内丁、朝日町

例祭の前は、近隣の神官で構成する「雅楽会」を月に一度開き、三管(笛、篳篥、笙)の練習をする。

７月に入ると、白丁は幟旗の準備をして神社の参道に設置し、稚児の乗る屋台を作って飾り付けをする。稚児は当番町内からの推薦で、未就学の男女各１名が努めることになっている。



明治 28 年扇田祭典の図　蓑虫山人（土岐源吾）画

〇７月１４日

各町内は会所（かいしょ）を準備し、さらに大通りに面した町内は、御神灯（ごしんとう）を高く掲げ、御神輿を迎える準備を整える。

中町会所の準備の様子

大町の会所と御神灯

〇７月１５日 宵宮

午後１時に神事を行い、その後扇田神明社から各町内の会所に御幣（ごへい）を授与する。それを会所に飾ると正式に会所開（かいしょびら）きとなる。

会所開きの後は、他の町内にごあいさつに回る。うちの若い衆に不始末があったときはこちらに連絡くださいというわけである。また、うちの町内を山車（やま）やこどもみこしが通る際はここにお知らせ下さいという通告でもある。外交担当が２人１組で出かけ、他の町内の会所に挨拶状（あいさつじょう）を置いてくるのだが、最盛期には８軒もの造り酒屋があった土地柄である。その際お酒が出され、それを拒否することは大変失礼なことであるとされているため、各町内は人選には気を配り、強者（つわもの）が外交担当に選ばれるのが通例である。

午後１時 30 分、囃子山車（やま）と各町内の子供みこしがお祓いを受け、賑やかに町内をめぐる。

例祭時は拝殿の外部建具が取り払われる

全町内が集結し神事が執り行われる

午後７時、花火(のろし)が上がり、宵宮祭である。宮司が祝詞を奏上し、２人の巫女が豊栄の舞と浦安の舞を奉納した後、玉串の奉奠と拝礼が行われる。

各町内に御幣が授与される

御幣を飾る大町会所

新町会所に挨拶する市川外交の皆さん

南町の子供みこし

○７月１６日　例祭

午前８時、例祭の神事は、祝詞奏上、浦安の鈴舞を奉納し、玉串を奉り拝礼となる。宮司、氏子総代会長、責任役員（２人）、氏子総代代表、神社委員代表、当番町内代表、猿田彦、白丁頭、稚児代表の順である。なお、猿田彦は代々同じ家が務めている。

続いてご祭神が御神輿にお移りいただく神幸祭である。神官が立ち並ぶ荘厳な雰囲気の中お出ましとなる。

午前９時 30 分、御神輿が出発。列の並びは、先触れを先頭に、笛・太鼓―猿田彦―角祓―神宝（楯・槍・剣）・神主―御神輿―神馬―稚児―総代の順である

御神輿が各町内を回る際、会所には重大な任務がある。町内名を染め抜いた紅白の法被をまとった各町内の外交担当は、弓張提灯を持って町内の入口で御神輿をお迎えする。そして、町内を恙なくお通りいただき、次の町内に引き継ぐという役割である。かつては、先払いとして白砂を路上に撒きながら先導したものだが、近年は数町内にのみこの伝統が受け継がれている。

例祭

前列左から白丁頭、猿田彦、祭典実行委員長

御祭神に御神輿に御移りいただく

御神輿渡御

提灯を飾る乳井家

今も残る昭和 20 年頃の御旅所表札（乳井家）

御神輿を待つ御旅所当主夫妻

御旅所神事を終え出発する御神輿

また、新町の宮嶋家が御旅所と定められており、ここでは御旅所神事が行われる。もとは造り酒屋の立派な家で、白木の塀をまわしているが、年に一度この日だけ開く専用の門を開き、御神輿をお迎えする。かつて久保田城から拝領してきた御神輿が陸揚げされた下川端船着き場付近でも神事が執り行われる。

御神輿の順路中、歴史的建造物の前を通過するが、江戸時代の建造物としては徳栄寺、明治時代の建造物としては扇田神明社の他正覚寺、長泉寺、宮嶋家住宅、武家門、乳安商事などが挙げられ、大正から昭和初期の建物としては、赤井家住宅、菅原家住宅がある。

御神輿が扇田神明社に戻ると還御の神事を行い、例祭の日程を終える。

夕刻になると、各町内の会所もまた終了の時間である。会所開きの時と同様に各町内の会所に会所仕舞いのあいさつに回り、すべての会所のあいさつが済むと会所は閉められる。

その後も氏子の家々では親戚や友人などが集まり、特産の比内地鶏を使ったきりたんぽなどを食べながら、お祭りはまだまだ続く。なおこの地方の人々は、すべからく我が家のきりたんぽが一番おいしいと思っており、何か行事があると、季節に関係なくお客様にふるまわれるのである。

御神輿渡御の順路は次頁のとおり。

会所前で拝礼を受ける御神輿

御神輿先導の引継ぎを待つ大町外交

無事戻ってきた御神輿

還御の儀

扇田神明社御神輿巡行図と歴史的建造物や神社仏閣

③ジャジャシコ

ジャジャシコは春に行われる火伏祭で、先導者が錫杖を突いて歩くときのジャラジャラという音が名前の由来である。幕末、大火が続いた事を憂いた市川の肝煎が始めた。市川は扇田神明社の所在する町内で、古くは扇田の枝郷であったが、幕末の時点では既に家並は扇田と繋がり、一体となっていた。

扇田神明社からジャジャシコに出発する神職たち

扇田神明社は鎮守社として、古来里人のため祓い、清め、鎮めてきた。ジャジャシコは、春告祭でありながらもその本質は鎮火であり、神職により家々を祓い清める祭である。

玄関先で水を撒きお祓いする

桜の開花にはまだ早い４月３日の朝、扇田の人々はバケツに水を汲み、小皿に塩を盛って柄杓と共に玄関先に置き神官の一行を待つ。

賑やかなところはなく、仰々しい儀式もないが、数人の神主が淡々と１日かけて扇田町内の 1,000 軒もの家をまわる行事として百数十年続いてきた。

錫杖を持つ消防団員

戦前はジャジャシコの経費が町費で賄われていた記録があり、明治の中頃から神武天皇祭に合わせて４月３日となって、現在まで続いている。

昭和初期の北鹿朝日新聞には、昭和 11 年(1936) ４月３日「鎮火祭延期」との記事がある。雪解けが遅いため 10 日頃まで延期したのだ。他の年には「冬囲等危険物を一刻も早く取り除く事」とあり、冬囲いが火事の原因であったことや、ジャジャシコが雪解け後の春告祭であることが伺える。

当日の朝は、扇田神明社で神事を行った後、錫杖を持った消防団員２人を先導に、太鼓を打つ白丁（例祭の白丁とは異なる）とともに６人の神職（うち２人は法螺貝を吹きながら）が扇田の家々を廻る。玄関先を大麻で祓い、手で塩を撒き、水を柄杓で高々と振りかける。家人が外へ出て空を見上げ、神職が撒く水を見上げる。無事に春がやってきたことをしみじみと感じる風景である。

（4）まとめ

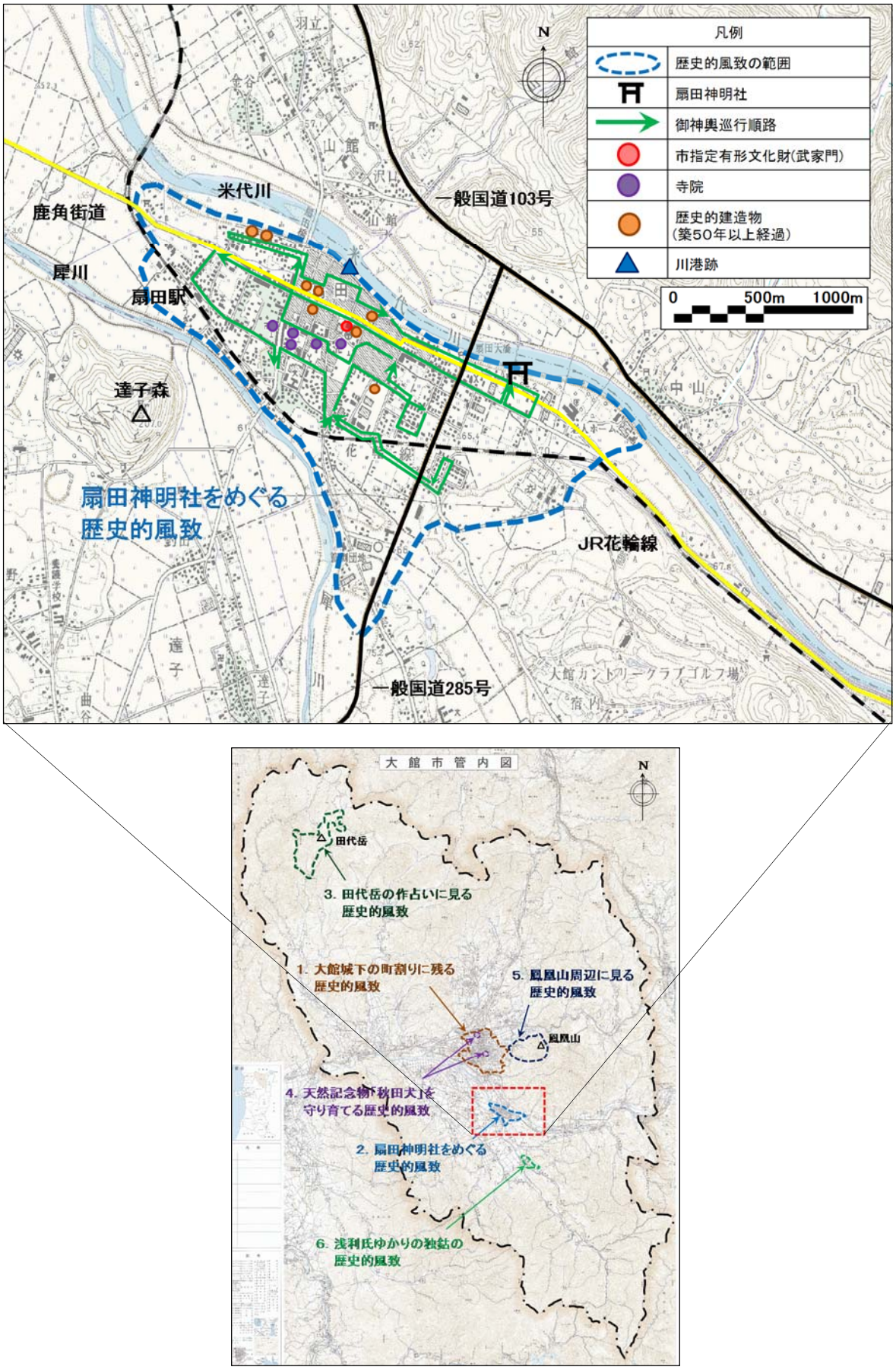
扇田は米代川の川港（かわみなと）、近郷近在（きんごうきんざい）の物資の集散地として、また、市（いち）が立ち商業地として発展してきたが、人々は折々の伝統行事も忘れずに伝承してきた。

扇田神明社の例祭では、住民が誇りとする佐竹宗家ゆかりの御神輿が古式に則り白丁によって扇田地区の全域に渡って渡御され、御旅所や各町内では伝統としきたりを守ってお迎えしお送りする。数百年前から連綿と受け継がれる昔と変わらぬ様式を、各町内で、また地域内で共有しているのである。

ジャジャシコでは、扇田の隅々に神職がまわって家々を祓い清める、住民は冬囲いをはずして神職を迎え、打水（うちみず）を見上げて冬の終わりと春の訪れを実感する。幕末以来続くこの祭もまた、ジャラジャラという錫杖の音とともに地域の住民に受け継がれている。

二つの行事は、どちらも神々を人々の生活の場にお迎えする祭であり、古くから扇田地区全体で行われ、扇田地区の発展とともにその範囲を拡大してきた。

これらは、戊辰戦争（1868 年）後に建てられた寺社や商家や古民家とともにあって地域の人々の営みの継続性と一体感を醸成（じょうせい）する場となっており、大館市が守り伝えるべき歴史的風致となっている。



扇田神明社をめぐる歴史的風致の範囲

【コラム】

○ハッタギ踊り

ハッタギ踊り

ハッタギ踊りは扇田の盆踊りである。大館市内のオリジナルの盆踊りはこの踊りのみである。始まりは江戸時代と言われている。戦前は、景気の良い年に町の地主にお伺いを立て開催していたようで、毎年のものではなかったらしい。

ハッタギ踊りが開かれる場所は、時代により変遷しているが、現在は扇田小学校正門前から北に延びる市道を占用して行われている。

命名の由来は、当地でハッタギとはバッタやイナゴの事で、飛び跳ねて踊る様がバッタのようだからという説と、飛び跳ねて手足を前に出す姿が稲のイナゴを追い払う様子を模したものだという説がある。盆踊りにつきものの太鼓は、農家が多い川端と市川だけが担当していることから、農業との関連も指摘されている。

夕方は子供たちも踊るが、午後８時ごろになると花火をもらって家に返され、それからは大人の時間である。

現在は８月 17・18 日に行われる。

○山コチンチコ

山コチンチコ

山コチンチコは子供七夕である。扇田小学校の町内子供会ごとに絵燈篭を作り、リヤカーに乗せるなどして扇田町内を練り歩く。

戦前は、山コチンチコが町内を回ると「お花」としてロウソクがあがり、子供たちはそのロウソクを換金してお菓子などを買って楽しんだが、戦前のある年禁止されてしまい、開催が一時中断された。

その後扇田小学校の創立 100 周年を機に過去の事業を見直していたＯＢたちの目に留まり、100 周年記念事業として昭和 48 年(1973)復活した。扇田小学校の 100 周年記念誌には、「ただ単に子どもの祭だけではなく、老人大人全町あげて往年の行事を盛り返そうという意気込み」「子どもの夢を育てるこのような行事は絶やさず、いつまでも続けてほしい」とあり、その期待に応えてＰＴＡ事業として現在まで続いている。

ジャジャシコ、ハッタギ踊り、山コチンチコと扇田にはカタカナの伝統行事が多いが、理由は不明である。方言を漢字にしにくかったのだろうか。なお、近年見ることはなくなったが、盆の送り火をボッキンコと呼んでいた。

○比内とりの市

昭和 60 年(1985) 1 月下旬の土日、ふるさとの冬祭「比内とりの市」が始まった。この当時は「比内地鶏(ひないじどり)」を特産物として全国に売り出そうと官民挙げて汗を流しており、祭の軸は食鳥(しょくちょう)への感謝であった。

当日の朝９時、扇田神明社でお祓いを受けた一隊が幟旗(のぼりはた)を持った白丁を先頭に、この年七五三の稚児(ちご)たちが馬そりに乗って続き、祭会場へ向け出発する。隊列は雅楽の調べと共に町内をめぐって祭会場へ到着する。馬そりが、市指定文化財「武家門」の前を通過するシーンは趣(おもむき)がある。到着した会場には木製の社が設置されている。そこで行う感謝祭がメイン行事である。感謝祭では神職がここで祭事を執り行う。

２日間にわたり、およそ３万人が来場し、「見る、食べる、遊ぶ」というイベントを楽しんでいく。比内とりの市は食べ物への感謝をバックボーンとして、30 年以上続いている。

比内とりの市　神迎えの儀

白丁人の町内巡行